國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 僕は魯迅が怖い、私は阿金がいやだ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 郭, 偉, Guo, Wei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000034

僕は魯迅が怖い、私は阿金がいやだ

郭　偉

武田泰淳は「L恐怖症」（『近代文学』一九四九年九、十月合併号）において自称「L恐怖症」患者である「僕」に次のように語らせた。

しかし何て言ったってあの種の存在、つまり批判には弱るんだ、こたえるんだ、厭だよ、実際。ねえ。文学者でなくなることは、もう僕などになるとたいして恐れんがね。しかし文学者でないことを明るみに出されるとなると、これ全くつらくてね。生活の問題もあり、僕のハートは痛むんだ。（中略）正直、僕はロジンが怖い。毛虫、ゲジゲジ、よりたちがわるい。季節をえらばずむかってきやがる。

文末の「註」によれば、「L」は「ロジン」の頭文字であると同時に「リテラチュア」をも意味する。言うまでもなく「ロジン」はあくなき批判精神の化身としての「魯迅」（LU, Xun 一八八一年―一九三六年）にほかならないが、その魯迅にも、文章を書く事で生計を立てている「私」に、厭でたまらない対象について語らせている作品がある。「このごろ私は阿金がいやでたまらない」と書きだされた「阿金」（『海燕』第二期、一九三六年二月）がそれである。「阿金」は魯迅が晩年に書いた、隣の外国人の家に住み込みで働く「阿金」という名の「阿媽」を中心にした身辺雑記風の作品で、作中の「私」によれば、「阿媽」とは「阿金」のような職業の女性に対する外国人からの呼び方である。「私」は「阿金」を嫌う理由を以下のように語る。

私が彼女を嫌う所以は、彼女が僅か数日にして、私の三十年来の信念と主張を動揺せしめたからである。（中略）

私は、私の文章の退歩を、阿金の喧騒のせいだとして罪を押っつけるつもりはない。それに以上の議論は、すこぶる八つ当たりの気味もある。だが、このごろ私は阿金が何よりいやでたまらない。彼女はどうも私の道をふさいでしまったらしい。（「阿金」『魯迅選集』第十一巻、松枝茂夫訳、一九五六年八月、岩波書店）

「私」の信念と主張を動揺させた点、「私」の執筆活動に支障をもたらした点は、「L恐怖症」患者としての「僕」の「ハート」と「生活の問題」と重ね合せることができる。そして「ハート」と「生活の問題」は、後述するように究極的には生命にまでかかわってくるのである。

魯迅は小説集『故事新編』（一九三六年一月、上海文化生活出版社）中の「采薇」という作品において儒者知識人である伯夷・叔斉を餓死に至らしめた「はしため」にも〈阿金〉という名を与えている。〈阿金〉は彼らに向かって「『普天の下、王土に非ざるなし』ですわ」と切って捨てた。その言葉は実のところ〈阿金〉の主人である小丙君からの受け売りにすぎないが、大知識人の伯夷・叔斉を結果的に餓死に至らしめるほどの力をもっていた。一方、「L恐怖症」の「僕」は「L」にさんざん悪態をついた揚句、結末では何者かに「短刀」で刺されることになる。犯人が「L」の「イミテーション」である「L病」患者なのか、それとも「ロジン」当人を意味するのかは定かではないが、「短刀」事件で確実に指摘できるのは刃物よりも鋭い「ロジン」の〈匕首＝言葉〉の強力な存在感である。「L恐怖症」とは言葉への恐怖症であるとともに、時空を超越して生き続ける「リテラチュア」の力への逆説的な礼賛であるとも言えよう。

泰淳には「阿金」も「采薇」も読んだ痕跡があるので影響関係も容易に指摘できるのだが、一九四四年から一九四六年にかけて、上海で「阿媽」に身近に接した泰淳は、魯迅作品からの先入観を払拭して独自の阿媽像を形成できたのだろうか。泰淳にとって、〈敵〉の〈敵〉は、定説に従って〈味方〉となりうるのだろうか。「願わくは阿金も中国女性の標本に数えられることのないように」と結語された、魯迅の「阿金」だが、泰淳文学におけるその受容を、「阿金」と同じ職業の女性を登場させた「夢の裏切り」（『改造』一九四八年十二月号）や『上海の螢』（『海』一九七六年二―九月号）を始め、「蝮のすえ」（『進路』一九四七年八―十月号）、「月光都市」（『人間美学』一九四八年十二月号）、「風媒花」（一九五二年一―十一月号）などで探ってみたい。それにしても、泰淳から見て「毛虫、ゲジゲジ、よりたちがわるい」「怖い」「ロジン」にも、「いやでたまらない」「阿金」がいたというところがおもしろい。

（日本文学・比較文学）